

瓶びんの中



高峰秀子

瓶の中

検印廃止

定価 一、五〇〇円 普通送料 一四〇円

昭和四十七年十二月一日第二刷発行

著者 高峰秀子

レイアウト 杉本正光

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一郵便番号一五一

電話 〇三〇(三七〇)三二二(代表)

振替 東京一九五六七〇番

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本

はしがき

いまの私はいったいなんだろう？ 主婦、雑文書き、古道具屋の女主人、そして女優もやっております、というところだろうか。「本職は？」と人に聞かれても返答に困る。

結婚以来、私は少しずつ自分の道を歩きはじめ、女優のセリフではない「自分の言葉」をしゃべりはじめた。月日も浅いことなので、その言葉を全部集めても小さな瓶を満たすにもおぼつかないのが恥ずかしい。

中身の薄さをゴマ化すために、「瓶の中」という題字は尊敬する梅原龍三郎先生に甘えた。

梅原先生はいま、画家の命である眼を病んでいらるが、ほとんど見えない眼でウンウン言いながら、表紙の字を書いてくださった。この本はたぶん、私の最後の本になるだろうが、立派な晴れ着を着せていただいてしあわせである。

目次

暮しのたのしみ

燭台	8
天眼鏡	10
文鎮	12
はんこ	14
鏡	16
灰皿	18
額	20
時計	22
キイ・ホルダー	24
扇	26
お香	28
紅入れ	30
花瓶	32
小引出し	34
衝立	36
飾り棚	38

きのうきょう	40
あの日から	47
顔とツラ	48
ロジャースの涙	49
シロ	50
おかげ人生	51
私の耳	52
真珠と女	55
ピッコロモンド 《小さな世界》	57
整理整頓芸のうち	61
和服好き	65
食べある記	

杯	72
酒徳利	74
箸おき	76
飯茶碗	78
珍味入れ	80

水滴	82
ようじ入れ	84
水差し	86
大皿	88
おべんとう箱	90
雑煮椀	92
しょうゆつぎ	94
食いしん坊夫婦ろん	96
夜中の一パイ	98
タクアンの思い出	99
偉大なる食いしん坊	100
女中さん太平記	107
うちのお正月	111
もうひとつのハワイ	115
香港只是一個算盤	121
中国への遠足	127
パスポート考	137

春秋秋思

松と菊 144

蘭 146

ポピー 148

白ゆり 150

立ち枯れ 152

コスモス 154

紅ばら 156

水仙 158

古い日記 160

血染めのブロマイド 167

なつかしい匂い 173

瓶の中 175

題字・イラストレーション 梅原龍三郎

カラー撮影 大倉 舜二

デザイン 杉本 正光

暮しのたのしみ

燭台

なんでも、光り輝くものは美しい。中でもその大将は太陽と月だろう。人間が作った光の中ではロウソクの炎ほど美しいものはないと私は思っている。

ロウソクは、仏教の伝来に伴って中国から日本に輸入されたという。奈良時代の昔である。西欧でもギリシア、ローマ以来、やみ、悪霊を払い、物を浄化する力があるとされていたとのことで、共に宗教的な必需品であつたらしい。どんな人でも仏壇や神棚にお燈明の火がゆらめいている風景を見たことがあるだろう。私の家には仏壇も神棚もない。が、私はロウソクの光が好きなので一年じゅうロウソクを欠かしたことがないから、いつの間にかこうした燭台がいくつかたまった。いずれも外国へ行つたときや、国内旅行のつれづれに求めたもので、エンゼルのいる赤銅のものは、パリ蚤の市産。ガラスのはフランスのいなかの古道具屋。

赤い小さなのは京都のがらくた屋。陶器のはポルトガルのものである。

停電のとき、私は大急ぎでこれらの燭台たちに火を点じ、そのゆらめく炎となつかしげなろうの匂いに包まれてうつとりとするへんな楽しみを持っている。

私たち夫婦はそろって不眠症なので、どちらかが寝そびれると、こっそりロウソクに灯をともしてその光の中で一ぱいきこしめす。という習慣がある。そんなときも、ロウソクの光は不思議に頭を休め、心を落ち着けてくれる。

アメリカには、キャンドル・ディナーというしゃれた習慣がある。私もニューヨークの新聞評論家のキャンドル・ディナーに招かれたことがあつた。オードブルにマルティニやシェリー酒のアペリチーフが終わると、食卓の燭台の六本の長いロウソクに火が点じられ、部屋のあかりはいっせいに消されてキャンドル・ディナーが始まつた。ロウソクのほの明るさの中で、野菜はその美しさを最高に發揮し、ぶどう酒のグラスはキラキラとロウソクの炎にはえ、女性たちはいっそう美しく見えた。そして、静かな人々の話

声は、心にしみ入るかのようであつた。

あんな楽しい雰囲気夕食はいまだかつてしたことがない。デザートも済んで、コーヒーのために私たちは元の電気のついた部屋へもどつた。ああ、そのときの人々の間のぬけたようなしじらしい表情を、今でも私は忘れることができない。

すべての文明の利器はたしかにすばらしく、便利である。私たちはそのためにどんなに大きな恩恵をこうむっているかしかない。けれどその恩恵に慣れすぎたために、人々はますますせいたくになり、更に新しい文明の利器を求めて突進し、それがこうじて、果ては原爆、水爆などという物騒なものまで発明して、世界じゅうの人々を恐怖に陥れるまでに発展させてしまふのである。

世界の死生をかけた一個のスイッチを握っているいく人かの人たちに、私は「ロウソクの炎をじつとみつめてごらんさない」とすすめたい。ほのかに、あるともしない風にゆらぎながらも、優しく燃えつづけるロウソクの炎の美しさは、その人たちにきつと心のふるさとを思い出させるに違いない。



天眼鏡

わかない、というこの便利なものを手にしたときの新鮮な驚きが、目に見えるようである。「こりゃ、たいしたものだ!」と、新しいペンをひねくりまわしている彼等の声さえ聞こえるようである。そしてその喜びは万年も書ける「万年筆」という大げさな名前となってこのペンに名づけられたのだろう。

また、たとえば、棒の先に細くどがつた刃のついたきりのようなもので「千枚通し」という便利なものがある。「重ねた紙を千枚だつて貫けるぞ!」というのだから、これもオーバーな愛嬌のある名前である。

万年筆も、天眼鏡も、千枚通しも、それは、つまり、昔の人たちが一つの物に對して実にナイーブな感情を持つて接していたということなので、それにひきかえ、このごろの私たちは、新しいものや珍しいものに対して、慣れすぎたとしてもいいのか、少々の刺激にはビクともしないすれっからしになってしまった、ということなのだろう。習うより慣れろ、というが、慣れすぎて、習うほうの謙虚さがお留守になつてゐるようである。人間

とはまったくあさはかなものである。さて、私が天眼鏡に興味を持ったのは、何年か前に外国でおみやげ物を物色していたときだった。わが家の年とつた女中さんが電話帳を見るときに小さな虫めがねを使つていたことを思い出して、その人のためにイタリア製のしゃれた虫めがねを買つたのがはじまりだった。

私は、この七、八年間、主人の口述筆記をしてゐるので、辞書をひく機会が多い。辞書の字は、のみのごとく小さいので、近眼の私には鼻がつかえるほど近づけなければ見えない。最近はおトシのせいか、鼻の下をのばしても眉をさか立ててもますます見えにくくなつてきた。そこで、あるとき、ふと思いついて、電話帳のそばにある彼女の虫めがねをちよいと失敬して辞書の上にかざしてみた。以来、虫めがねは私の必需品の一つになつたというわけである。これさえあれば、私はバアサマになつても主人の口述筆記はスイスイだ、とうれしくてしかたがない。私の大事な天眼鏡は三つ。この中のどれかが、常に辞書のわきに鎮座ましましてゐる。

「天眼鏡」なんと、古くさく、なつかしく、こつけない名前だろう。辞書をひいたら、「物体を拡大して見るための凸レンズ。拡大鏡。あるいはルーペともいう」と記されている。拡大鏡。ルーペ。虫めがね。だが私はなんとなく「天眼鏡」という大時代な名前がいちばん好きだ。考えてみると、物の名前というものは実におもしろい。たとえば「万年筆」という名前にしてもずいぶん大げさでユーモアがある。長いジクに、すぐに摩滅してダメになってしまうペン先をつけ替えてはインクつぼにつつ込みながら字を書いていたわが祖先たちが、中にインクを入れさえすれば驚くほど長時間書けて、おまけにキャップをはめればインクがか



文鎮

なんだか判じ物のような写真だが、これはみんな主人の愛用の文鎮である。彼は物を書く職業なので、大きな仕事机の上はいつも書きかけの原稿用紙、新聞の切抜き、開きっぱなしの辞書、未整理の手紙などで雑然としている。

ほこりがたまろうが、どうしようが、けっして他人にさわらせない。ちよっとそうじでも、と思つて手を出すと、くちびるをとんがらせてイヤな顔をする。

そして、それらの番人をしているのが、この文鎮どもである。いろいろな文鎮がそれぞれのの上に一つずつのつて、主人の帰りを待っているのはアイキョウがある。仕事に関する資料、その他の大事なものを押えるのだから、重いものならなんでもいい、というわけにはいかないらしく、到来物の、いかにも文鎮、文鎮したもの

は使わない。

日本の文鎮は横長の富士山形やせんす形など常識的な形が多く、なんとなく、

お正月の書きぞめを思い出させる。それに比べるとヨーロッパのものは、用途は同じでも想像外にキテレツな形の文鎮がある。この写真のはみんなヨーロッパの古道具屋にころがつていたものばかりだ。男の人はどこか子どもっぽいところがあつて、おもちゃが好きだ。文鎮も主人にとっては多分おもちゃのつもりなのだろう、と私は思う。

旅先ではもっぱら、石ころを使う。東京で文鎮代わりの石ころをさがすのは時間の浪費だが、地方の河原でも散歩すれば、平べったいのや細長いのや、きめの細かいのやあらいのや、文鎮になる石ころがたくさんある。彼は、手ごろの石こ

ろを拾つてきては、せっけんでゴシゴシ洗い、原稿用紙の上にのせて、その形を楽しんでいる。

私は、はじめ、変な趣味の男と結婚したな、と思つていたが、亭主の好きななとやらで、私も知らず知らずに文鎮を集めだした。私のは、こういうガンコなやからと違って、中国の玉のもの、イタリアのガラス玉、など、ぐつと優雅で、上品である。それらをちよいと横に置いて『ミセス』の原稿など書くのはなかなかオツなものである。

仕事のないときには、種々な文鎮たちが棚の上にズラズラと並ぶ。文鎮はやはり何かの上に納まって用をたしているときがいちばんよろしい。棚の上であくびをしている文鎮どもは、いかにも手もちぶさたな感じで、こっけいな存在である。



外国人のように、身分証明書を持ち歩く習慣のない私たち日本人には、自分がどこの何兵衛であるか、という確固たる証拠がない。唯一の自己証明に役だつものといえば「自分の名前を彫ったはんこ」

一つであるというのは、考えてみればひどく心もとない話である。そのはんこなる代物も、そこらの文房具屋でむずうさに売っているし、偽造も簡単、盗難の心配もあり、で、だから実印届けだ、印鑑証明だ、と複雑になっていくのだろうが、はんこの存在はどうも百害あって一利なしの感がある。

私はある日、必要あって印鑑証明をとるために代理人にはんこを持って区役所へ行ってもらった。ところが、代理人ではなく本人がそのはんこを持って来い、と言われ、どうしても来られぬなら「この人を代理人とする」と書いた紙にはんこを押したものを持って来い、としかられたそうである。代理人はいったん、区役所を出て、言われたとおりに書類を作り、はんこをペタンと押して、ふたたび窓口へ行ったらスイと用事が足りたと言つて、にやにやして帰つて来た。そうか

はんこ

と思うと、わが家の運転手や通い女中さんが定期券を買うにはつい先だってまで雇い主のはんこが必要だったが、このほうはんこの主にまかり出るとは一度も言われたことがない。ということはインチキをしてそこらの三文判を押して行つても通つてしまうということで、向こうがいいかげんだからこつちもいいかげんをしてやろう、という気を起こさせてもしかたがないことになる。何がほかからない世の中で「盲ばん」とは妙を得たことを言つたものである。

はんこ一つがその人間を証明し、はんこ一つへの信用が天下国家を動かすともなると、そら恐ろしい気がしてくる。

外国ではいかなる場合も本人の署名だけがものをいう。契約書、パスポート、銀行小切手、通帳、トラベラーズ・チェック、その他いろいろである。筆跡というものは実に個性があるものらしく、警

察でも筆跡鑑定が決め手となつて事件のホシをあげることも多いと聞く。本人の手で書く署名より、その下にばんやりかすれたはんこのほうを信用する私たちを見たら、外国人はさぞびくりすることだろう。

最近では日本の銀行でも、サイン方式の通帳ができたし、ホテルや買い物の支払いをサインでする方法が普及しつつあるようで、昔のように「はんこをおひとつ——」という言葉をあまり聞かなくなつた。「判で押したような」とか「太鼓判を押す」とかいう形容詞も将来は自然消滅するかもしれない。

私は昔から「はんこ」に凝つたり、「印相」にこだわつたり、つまり判に興味を持ったこともなかったが、先年、中国に旅行したとき、おみやげに二個の印鑑を贈られた。さすがに文字の国だけあってなんと美しい彫りの印鑑で私は大喜びで日本へ持ち帰り、前言をひるがえして、むやみやたらとペタペタはんこを押しはじめた。どうも、我ながらお恥ずかしいのだがしかたがない。私の心をとらえたはんこはこれです。